

## 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【授業担当者】

所属・職名：農林水産学研究科・教授

氏 名：寺岡行雄

授業科目名	海外森林・林業事情
研修先 (大学・国・都市名)	ロッテンブルク林業大学(ドイツ・ロッテンブルク市)
研修期間	令和 4年 9月 16日 ~ 令和 4年 9月 28日
<p>〔研修の目的・概要〕</p> <p>世界の農林業のうち、持続可能な木材生産が先進国で行われている。中でも環境に配慮した先導的な取組で有名なドイツの森林・林業・森林利用を見学することにより、森林・林業および森林観の多様性を学び、異文化を理解する素養および国際的視野を身につけることを目的としている。</p> <p>本研修は、ドイツで森林・林業の盛んなバーデンビュルテンベルク州における林業技術者養成を行っているロッテンブルク林業大学において、ドイツにおける森林管理と林業生産等の学習を行うものである。本学との学術交流協定に基づき、2年間の休止を経て再開実施された。学部生5名、大学院生4名と引率教員1名の計10名が参加した。研修内容は、択伐林経営、気候変動下における森林施業と樹種転換、国立公園における野生鳥獣管理、機械化素材生産、大学演習林の保護区域での長期森林動態に関する研究、ナラ林での育林作業、大学でのハンティング教育についてであった。研修メニューはロッテンブルク林業大学のハイン教授によって構成され、州有林の森林官から現場の説明を受けた。講義は英語またはドイツ語から英語通訳によって行われた。</p>	
<p>〔研修の成果〕</p> <p>事前学習として、ドイツ全般に関する情報提供を行い、森林・林業関係の専門用語について確認した。また、ドイツでの生活や携行品、安全な旅行・滞在に関する留意事項をしっかりと確認した。</p> <p>我が国とは異なる森林・林業、街並み、食事、生活習慣などを見学、体験することは、別紙5-2の参加大学院生からの報告にある通り、大きな刺激と気づきにつながったようである。特に、講義室ではなく、現地の森林における解説と議論が進められる講義スタイルに学生たちの戸惑いがあったが、慣れるに従って質問が出るようになったことは、学びにおける意識改革ができた。単に大学での学習のためだけでなく、人生での貴重な経験として記憶に残ったようであり、森林・林業および森林観の多様性を学び、異文化を理解するという本研修の目的は達成されたものと判断している。</p> <p>多くの大学院生が報告しているように、語学能力の向上に取り組む意欲が出たこと、国内だけでなく、広く海外の問題にも関心を持つことに大切さを学んだ学生が多く、グローバル人材として活躍するための下地ができたものとする。海外を知ることで、自分の足元を見つめ直すのは、海外経験を経た方が体験することである。現在修士論文研究等で取り組んでいる国内の森林管理や林業に関する課題への考え方も変化してくるものと期待している。</p> <p>今回の研修の実施にあたり、本学からの学生渡航費の支援により経済的負担が緩和され、より多くの学生の研修参加につながった。研修実施担当者として大学当局のご尽力に重ねて感謝したい。</p> <p>なお、令和4年9月23日にロッテンブルク林業大学のカイザー学長への表敬訪問を行うことができ、ドイツ及びロッテンブルクへの訪問に対して謝意が表明された。さらに、本学との学術交流協定の更新に賛同し、今後も交流活動を継続してゆくことが確認された。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>9月中旬に出国72時間前のPCR検査の義務が解除され、旅行スケジュールに余裕ができた。参加者の1名がワクチン接種2回しか終わっておらず、PCR検査が必要であった。訪問国がドイツであったため、PCR検査受検可能な場所も多かったが、別行動で検査を受けることとなった。MySOSでPCR検査結果がどのように反映されるのか不明であったが、問題なく青色になった。</p> <p>本研修は、ロッテンブルク林業大学との国内協定校(岩手大学、信州大学)が合同で行っていたもので、来年度には両大学ともドイツ研修を実施する意向である。今回は、本学参加者<math>\alpha</math>で13名であったことから説明者との距離も近く深い学習につながった。来年度30名以上の研修となる可能性もあり、実施時期や内容について再検討を行いたい。</p> <p>大学院生には、森林科学で学んできた内容に復習でもあり、英語での説明もかなり理解できていたようである。質問や意見を述べるのがうまくできなかったとの反省の言葉もあり、英語力の向上が必要である。</p>	